

【聖書】

1 イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。2 イエスは、二そうの舟が岸にあるのをご覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。3 そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。

4 話し終わったとき、シモンに「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われた。5 シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と答えた。6 そして漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。7 そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。

8 これを見たシモン・ペトロは、イエスの足元にひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。9 とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。10 シモンの仲間、ゼベタイの子のヤコブもヨハネも同様だった。

すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」11 そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

1 導入

漁師シモンの人生が大きく変わろうとしています。シモンは、人となりたる救い主イエスと出会い、従う者とされます。しかし、シモン・ペトロの方から主イエスの所に赴いたわけではありません。イエス様がシモン・ペトロの内深くへと歩みよってくださったので、彼はイエス様に従う者とされました。最初の弟子シモン・ペトロを通じて、イエス様を信じ従っていくことの恵みを、聖書に聴いていきたいと思います。

2 ゲネサレト湖畔

今日の箇所直前、4章の最後には“イエスは言われた。「他の町々にも神の国の福音を告げ知らせねばならない。わたしはそのために遣わされたのだ。」そして、ユダヤの諸会堂に行って宣教された。”とあります。イエス様は神の霊に満たされて、他の町々でも安息日に会堂の礼拝で、聖書を取り次ぎました。神の国がまさにやってきている事を言葉と業で宣べ伝えたのです。こちらの町、あちらの村からイエスさまが宣べ伝える神の国を喜ぶ賛美の声が上がり、大きな反響となってあたりの地方に鳴り響きます。

そして今、イエス様は、宣教の旅からご自分の町・カファルナウムへと戻ってこられ、ゲネサレト湖の畔に立っておられます。ゲネサレト湖とはガリラヤ湖の別名です。少し離れた所では一晩の漁を終えた男達が道具の片付けをしていました。

しかし、人々は、安息日に会堂でイエス様の説教を聞く事だけでは満足しなくなっていたようです。安息日以外でも、イエス様の口を通して語られる神の言葉を聞きたい…と雪崩をうってゲネサレト湖畔にいるイエス様のもとへと押し寄せてきました。「群衆が周りに押し寄せてきた」恵みの言葉に飢え渴いていた人々の熱気が感じられます。

3 虚しさの中のシモン

しかし、そんな熱気も我関せずと黙々と働く男達があります。漁の後片付けをしていた漁師達です。シモンもその一人でした。彼はイエス様をよく知っていましたし、その説教に耳を傾ける喜びも知っていました。ですが、今、彼は説教を聞く気持ちにはなれません。彼と仲間たちは一晩中働いて魚一匹とれなかったからです。ただでさえ疲れる徹夜。全くの無駄骨だったのだからなおさらでしょう。疲労は二倍三倍となってシモンとその仲間の心と身体にはりついていました。ですが、明日の漁のために網だけは洗っておかなくてはなりません。彼らは日々の生活のための労働に縛り付けられていました。

それにしても、熟練の漁師達が慣れ親しんだ湖で一晩中漁をしても魚一匹とれないなんて事があるものでしょうか。素人ならともかく、シモン達はプロの漁師です。いつ、どこに網を下ろせばどんな魚がとれるか…湖の水の流れも漁場もそこに住む魚についても誰よりもよく知っていた彼ら。その彼らが、「ここに必ずいる筈だ」と目星をつけた所に繰り返し網を降ろしても一匹の魚もかからないという事は、滅多にないこと。あえりえないような仕事の失敗に直面し、彼らの漁師としてのプライドは砕かれ、惨めな気持ちであったでしょう。こんな漁が続いたらどうなるのか…という不安もあったでしょう。ですが、あまりにも疲れているので今は何かを考える気力も湧かず、「とりあえず今はただ早く網を洗って家に帰って眠りたい」その一心であった者もいたに違いありません。

すぐ近くでイエス様の説教が始まろうとしていても、シモン達に神の言葉を聴こうという思いは湧いてきませんでした。神の言葉を聞くのはもっと心に余裕がある時だ…と彼らは思っていたのではないのでしょうか。生活のために必死で働いていれば、教会に行く暇も余裕もない、なるほど神はよい方らしいし、信仰するのも悪くはない、でもそれは、きちんと仕事できてからのこと、生活できずに礼拝して何になる、礼拝は二の次だと考えてしまう…私たち誰の心の中にもある思いが、この時のシモンの心の中にあったとしても不思議ではありません。

そんな心の底には、実は神の言葉の力を見くびる私たち人間の姿があります。シモンも思ったでしょう。「確かに、イエス先生は自分の姑を癒してくださった。でも徹夜の漁で一匹の魚も得る事ができなかった自分たちに、イエス先生は何の力も持たない、説教を聴いたとしても魚が捕れるわけじゃない。」そうシモンが考えたとしても不自然ではないでしょう。

私たちは、生活のために外で働いたり、家族の面倒を見たり、ご近所さんの為に働いたり、教会に奉仕するなど様々な働きをして生きていますが、いつも充実している、やり甲斐に満ちている…というわけにはいきません。時に「私の働きが何になるというのだ？ 結局、虚しく終わるだけではないか」という気持ちになる事があります。

ある方は言います。「もし、今、そのような気持ちになる事がなかったとしても、将来、私たち人間は必ず一度は自分の生の虚しさに囚われる。」と。私たちが一人残らず死を迎えるからです。死に行く自分を知るとき、「自分がこれまで一所懸命働いてきたのは何のためであったか、全ては自分と共に消えゆくもの、空しいのではないか」という疑いが自分を捉える…というのです。元気なとき、意気盛んなときには気づかなくても、力の衰えを感じたときに、「一所懸命働いてきても行き着く先はこれか、自分はなんと空しいあゆみをしてきたのか」という思いに駆られるというのです。シモンも今、生きる事の虚しさの中に力なく網を洗っておりました。

4 シモンに近づかれる主イエス

シモン達がすぐ側で、ご自分の説教に耳を傾けようとししないで、ただ網を洗っている姿を、主イエスは無視なさってもよかったのかもしれませんが。律法学者なら無視したに違いないでしょう。いえ、律法学者だけではない、今日の教会の私たちもまた、イエス様の言葉を聴こうとしない人たちに対して「イエス・キリストの事柄はこの人には関係がない」と、その傍らを素通りしている事があるのではないのでしょうか。

ですが、主イエスは違いました。シモンに近づかれ、「あなたの舟を貸してください」と声をかけられます。生きる事の虚しさを痛感し神の言葉を聞く気力をなくしているシモン。その虚しさの中に、イエス様は踏み込んで来られるのです。シモンが、私たちがイエス様を選んだのではありません。イエス様がシモンを、私たちを選び、生と死の虚しさに苛まれて気力をなくしている者達の方へと一歩踏み込んできて下さいます。

5 深みに漕ぎ出せ

そうしてイエス様が語られる慰め深い言葉。シモンはイエス様の口から出る神の言葉を誰よりも間近で聞く幸いを得ます。彼の疲れた心に神の慈しみの言葉が注がれた事でしょう。

しかし、イエス様が話し終わった後に、シモンに向かって仰った事は実に意外な命令でした。「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい。**」人間の常識では考えられない、馬鹿げた命令です。プロの漁師達が知恵と力を絞って一晩格闘したのに魚一匹取れなかったのです。イエス様の前職は大工です。漁の素人。しかも、今は漁には不向きな昼間です。「どう考えても魚がとれるわけがない!」。人間的な目で見れば何の可能性も見いだせません。

6 お言葉ですから

不合理極まりないイエス様の命令。しかもシモン達は徹夜明け。いくらでも断る理由がありました。断らない理由が見当たらない位です。シモンは言えた筈です。「それは後日に、またの機会にしましょう」と。いくらでも断れた。

でも、このとき、シモンは断らずに、沖へと漕ぎ出します。その理由はただ一つです。「先生、あなたのお言葉ですから」。イエスさま、あなたが仰るのであれば、あなたのお言葉ですから、そのようにしましょう。人間の知恵や経験によるものではありません、あなたの言葉以外に私がこうする理由はありません。ただイエス様、あなたの言葉のゆえに、私は漕ぎ出します。そうしてシモンは沖へと漕ぎ出していきました。

イエス様の言葉だけを信じて沖へと漕ぎ出したシモンの行動を、『シモン・ペトロの冒険』と名付けた人がいます。毎晩漁をしているときに通いなれているガリラヤの湖のいつもの水路を辿りながら、しかし、シモンはこの時全く初めての冒険に出て行っています。イエス様の御言葉にのみ望みを置くという冒険です。新しい歩み、未知の領域へとシモンはイエス様のみ言葉のみを頼りに踏み出していきました。その舟にシモンは一人ではなかった、主イエスが共にいてくださいました。

7 人生の主演は自分だけ？

私たちは、「人生の主演は自分であり、自分の人生を動かし切り開いていくのは自分自身だ」と勧められています。この世は、そのような言葉で満ちています。しかし、果たして私たちは自分自身の一生を自分で動かし切り開いていけるでしょうか。仮にできたとしても自分で切り開く道が正しい道と言えるでしょうか。自己中心的で、気づかぬうちに他の人を蔑ろにするような道となる事はないでしょうか。私たち人間は、人生を導いていけるほどに確かで完全な正しさを自分たちの内部にもっていると言えるのでしょうか。

いえ、そうではない…と聖書は語ります。私たち人間は、この世界も、いや、自分自身についてさえもよく知らないのです。そして襲い来る困難に直面し打ち砕かれ、生きる事の虚しさに囚われ、しゃがみこんでしまう、「あなたの人生を切り開いていくのはあなた自身だ」という言葉が何の力も持たず虚ろに響くような所に、そんな言葉が何の力も持たないような所に私たちは立たせられる事があります。

ですが、そのような場所でこそ、私たちにはイエス様と出会います。イエス様が踏み込んでくださるからです。そうして、「お言葉ですから」という信仰が与えられるのです。「私には、それがいい選択なのかは分かりません。けれども、私の人生をまことに切り開くのは私ではなく、イエスさま、あなたです。だから、私はあなたの言葉だから従います。あなたの言葉に導かれて沖に漕ぎ出します。」自分に望をおかず、ただイエス・キリストのみに希望を置く、シモン・ペトロの冒険は、私たちの冒険です。

8 神の深み

どこへ目指す冒険なのか。4節のイエス様の命令の中で「沖」と訳されている語は、直訳すると「深み」となります。「深いところに漕ぎ出して、そこに網を下ろしなさい」と訳している聖書もあります。何の深みなのでしょう。神の恵みの深みだ…と説教した牧師がいます。私もそうだと思います。私たち人間が知りえないような深みを持つ神の義、神の愛でありましょう。私達の罪を凌駕する深み。全ての人間を圧倒する深くて大きい神の

恵みでありましょう。「あなたは、愛なる神の底知れぬ恵みへと漕ぎ出しなさい」とイエス様はシモンを招いているようです。イエス・キリストを信じる信仰とは、行先は知らぬまま、主イエスと共に同じ舟にのり、語られる御言葉の示す方向へ、神の恵みの深みへと漕ぎ出す冒険だと言えるでしょう。

9 キリストに目を注ぐ

イエス様のお言葉通り深みに網を下ろした時、考えられないようなおびただしい魚が網にかかりました。この時、シモンを捕らえたのは、二艘の舟にいっぱいになった魚ではありませんでした。大漁をもたらしたお方、イエス様が彼を捕らえました。彼は、イエス様を利用して一儲けしようなんて考えたものではありません。眩いばかりの神の光をイエス様に見出しました。イエス様に現れた神の力に打ち貫かれます。大漁の喜びなどふっとぶ程の恐れを覚えたのです。イエス様の前で、鋭く大きい神の力に圧倒されて、シモンは自分の本当の姿に気づいたからです。

神の力も知らずに自分の弱さにうずくまり神の招きを拒む者、自分の現実の問題を解決する力は神にないと侮り、自力で生きていこうする者。彼は神に背く自分の罪に気づかされます。自分は神のまばゆい光に到底耐ええない者、滅び去るを得ない者だと気づかされて、シモンは叫びます。「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」

10 まことの罪

ある神学者がこのように言いました。「私たちは次のように考えがちだ。“人間は自分の罪を知る。そして次にキリストを見出し従うようになり、神から祝福され、罪が清められる…と。ところが福音書はそのようには語っていない。」と。

福音書は次のように語っています。まず最初に、イエス・キリストが私たちに近づいてくださる、それも私たちが罪人かどうかを全く問わずに近づいてくださいます。そしてシモンに命じたように、私たち一人一人にも語りかけて、イエス様の言葉を実行するように言われるのです。そのとき、シモンは、私たちは、イエスの言葉を実行します。確かに彼も我々も罪ある者ですが、それでも不思議と「あなたのお言葉ですから」と行う信仰が与えられます。その結果、父なる神は豊かな祝福をもってシモンに、私たちに答えてくださいます。

そして神の祝福を主イエスの前で受けるまさにその時、初めて私たちは自分が罪人だと気づかされるのであります。それも主イエスと一緒におれないような罪人、深刻な大きな罪人である事に気づかされるのです。

ルカ福音書の伝える、父の深い恵みを知って初めて、自分にそれを受ける資格がない事を知って悔い改めた放蕩息子のようなのです。父親の財産の生前分与を要求し財産を受け取ると父の家を離れ、外国で放蕩三昧をしお金を使い尽くして食い詰めてしまった放蕩息子。プライドも何もかも踏みにじられ、飢えて豚の餌を食べてでも生き延びたい

とあさましく落ちぶれ果てた彼は、父親の家に戻る事を決心します。そして父親の家が近くなってきた時、家を出ていった息子が帰ってくるのをずっと待ち続けた父親はかけよって行ってボロボロに薄汚れた息子をはっきりと抱き寄せ、「よく帰ってきた、この日をずっと待っていた」と喜ぶのです。放蕩息子が思ってもみない父の愛でした。その父親の胸の中に抱きしめられて、放蕩息子は初めて自分の罪を悟ります。そして心の底から「父さん、私は神にも父さんにも罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません」と自分の罪を告白するのです。

シモン・ペトロも同じでありました。大漁の魚に示される父なる神の圧倒的な恵みを知った時、「主イエスよ、私は、このような恵みを、このような祝福を受けるのに値しない罪人です！」と彼は叫んだのです。

いったい、どうして、恵みの深みが自分と出会ってくださる前に、人が自分の本当の姿を知ることができるのでしょうか。どうして前もって自分が罪人だと語れるのでしょうか。恵みの深みと出会う前に私たちが語れる罪があるとしたら、それはつくりごとの罪。改革者ルターがいう「人形の罪」なのです。

シモンが使徒ペトロとなったのは、人のよい性格でも、少しばかりの服従でもありませんでした。彼が「主よ、わたしから離れてください。私は罪深い者です」と叫んでひれ伏したからこそ、彼は使徒ペトロとなったのです。イエス様を通じて恵み深みと出会い自分の本当の姿が示され、それを悲しんだからこそ使徒となることができました。この言葉こそシモンが使徒ペトロとなった理由なのです。この言葉は使徒ペトロの本質です。それは、それまで「先生」と呼んでいたシモンが、「主よ」と私の主人よ！私の支配者よ！と叫んでいる事からも分かります。

だからこそ、福音書記者ルカは、それまで「シモン」とだけ記していた男を、8節だけは「シモン・ペトロ」としています。ペトロとは後に主イエスがシモンにつけたニックネームで、“岩”という意味があります。主はそのとき「この岩の上に私の教会を建てる」とさえ言われた岩です。主の憐れみの内に己の姿を示され、ひれ伏して、「主よ、離れてください。私は罪人ですから」という信仰を土台として、私たち教会が建てられ上げています。

11 神の国に参加する

神の恵みの深みに、自分の罪を知ったシモン・ペトロに、主イエスは語りかけます。「恐れることはない。」これは、「あなたの罪は赦されたのだから、神を恐れる必要はありません」を意味し、罪の赦しの宣言だと言われています。そして、イエス様はさらに一歩シモン・ペトロに近づき「今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」とおっしゃいます。

漁師とは、聖書では神の国のために働く者の喩えとして用いられています。神の国には清い者しか入れない、漁師は、人を清いか清くないか審いて神の国の為に働く者…長いあいだ漁師は裁きのモチーフとして使われていました。

しかし、主イエスがシモン・ペトロが「今から後、あなたは人間を捕る漁師になる」と仰った時、全く異なる新しい真実が示されました。自分の思いではなく、ただ主イエスのお

言葉に従って、父なる神の憐れみの網、恵みの網を大きくうち下ろし、清い魚も清くない魚も主イエスのもとへと連れて行く者が神の国の漁師だと明らかになりました。

この言葉を聞いた彼らは「**全てを捨ててイエスに従った**」とあります。彼らは何よりも、自分に望みを置く生き方、自分が主人公である生き方を捨てる決心をしたのではないのでしょうか。そして主イエスにのみ望みを置き頼る人生を歩はじめました。それは「お言葉ですから」と言って神の深みに漕ぎ出したあの冒険を、大いなる祝福につながったあの冒険を、自分の生き方にするという事でした。

シモン・ペトロも仲間達もすぐに完全に、自分に望みを置く歩を捨て去る事ができたかというところではありません。一生を通じてシモン・ペトロ達は自分を捨てる人生を学んでいったのです。彼らはこの後も度々失敗しました。しかし、その都度、イエス・キリストご自身が彼らに歩み寄り、新たに彼らと出会ってくださいました。

その究極が主イエスが十字架にかかった時の彼らの逃亡です。誰も主イエスのお側に残らなかった。彼らの冒険の結末は失敗に終わった…そうと思えなかった時、甦りの主イエスが彼らに歩み寄ってくださり、「平安があるように」と中心に立ってくださったのです。

彼らはそうして新たに主イエスに出会い、自分の罪を新たに発見し、み前に悔い改める恵みを知り、冒険の旅を続けたのです。自分に希望をおかず、イエス・キリストのみに希望を置く生き方を新たに学び続けたのです。それは神の恵みの深みに網を下ろす、神の国の漁師の航海、冒険旅行です。その喜びに満ちた冒険の旅に私たちも招かれています。恐れず、一步を踏み出していきましょう。必ずイエス様が共にいて導いてくださいます。